蕪村遺稿

全

へ 5
1375

門 へ 利5
號 1375
巻

呉春寫
錢之而摹

洛山一日墨潑生痕晴日
寿星禅稲殺手足下身之
又化大女子周月七
米上謝蕪村
盟寿三日春辛卯由和書

雪ちる日は人来山に会して蕪村
の遺墨を見る 書あり画あり
肖像あり 多梅もさく香ふ中に
遺稿と題する写本あり 何人の手
に成りけん 杜撰甚しく殆と体を為
さねと 村の作ならは疑ふへからす 霰石
すなはち俳書に参し更に遺句を

集めて此書を成す事梓にちりはむ
古人の意にかなふといふものあらは
道と気とのみを継て全稿章の
塚を叩け松風百年良は其まゝ
書画是 蕪村のいのちなるへき
明治庚子春
月郎

蕪村遺稿

春之部

歳旦をしたり皃なる俳諧中
うくひすの枝ふみはつす初音哉
鶯や堤を下る水乃中
気来浮る鶯を見しそおかしそ去る
うくひすさ跡日遠し畑の人
留主守の鶯遠く日ぬ
篭さうくひす啼や夕されの時

うぐひすの啼やあちら向こちら向
鶯や聖仲乃墓の竹百竿
檀木所うぐひす西へ飛去め
うぐひすいやも宗任ら神言り
うぐひすや柏伴ともふれかね
鶯や梅好あるものり盥
うぐひすや公達の里の里うれ
ん啼あてうぐひすも飛や山おろし
口か宿のうぐひすそ咲ん聖にもそゝ

ろ

泉よあらて鶯ゆらなくひとりか
一羽来て啼る竹い何梅のこ
堤と結んう枕梅乃あるし郎
さもしろと留さおて梅見郎
水さ散て花ちあおちぬ岸の梅
ういちりのふたぬ川ぬや梅の月
世継の梅あらも赤くもあらあ郎
氏名の喰ひむかしや梅の風
白梅や口ぞれい花まも似たる郎

紅梅や人日の武蔵ハ松かしい
梅か香の立のぼりてや月の暈
散るたびにおいゆく梅の梢かな
雪解や妹か巨燵に足袋わすれし
池田から炭くれし春の寒さかな
あらくと霞なかるゝ様かな
やぶいりの宿は狂女のとなりかな
やぶ入や鳩にめてゝ男山
粽ゆふ又入を守れ子あめの地蔵尊

朧月大河をのほる御舟かな
おぼろ月蛙に濁る水や空
月おぼろ高野の坊の夜食時
不二颪十三州のやなぎかな
柳もやとられいあ東柳下恵
門前の姥か柳の糸けめ
風吹ぬ夜はもの凄き柳かな
やぶいりの日のくれかゝる野辺かな
春風の流れ入たる書院哉

春風に何着る衆の笠の白か
小舟にも便都遠るや春の水
ふられ来るはれても春の水さる
湖や堅田わりと春乃水
里人もハ猪はかれ春の水
春乃水ふみれはまずをめらしや
昼舟に狸母の世た東春の水
あふれ来て池に広るや春の水
春雨や珠数ハ拾したる雫

春雨にぬれはゝ屋根の毛氈か
池と川ひとつになりぬ春の雨
春雨や雀の七日をふりたらむ
春雨や同車の君がさゝめごと
たるまあの中を流るて大河か
栗や山へたれしぬるや春の雨
春雨に下駄買ふ初瀬の法師かな
春雨にぬるゝ麗君乃背中か
春雨や蛙の腹いまたぬれはせ

春の雨宮一のあふさたまかり
釣鐘にとまりてねむるこてふ哉
ほくれし春や昔のちまもひ哉
春の夜や狐の誘ふ上童
等閑に香炷く春の夕哉
春の夕絶なむとする香をつぐ
椿落て昨日の雨をこほしけり
謝そくれや田螺の戸ゝとる
春雨や我宿も見えてくれはし

畑打や道問人の見えずなりぬ
畑打の目にはなれずよ摩耶が嶽
春水や平うちながす唯一人
畑打や峯の坊の鶏ぞ鳴
菜畠にうつせる家ゝ梅木哉
陽炎やひそみもあへぬ土就
打くるゝつゝひ凋れほし
郎塞て猶也る旅のいそぎ哉
山蜂や木丸殿の庵の中

古井や蜂こもち拂ふみなれ棹
花と去めこノの足あとしめある
たんぽの足あとに茶ふ花は水
雛飾やふていなかあの紙日山
ちし帰や後里に坊の菖白畠
河内女乃宿にゐぬ日や雛の夕
畑も見と子とも茶漂る燕かな
ぬすたぬを金の間とせる燕かな
乱魚とある子育る春ぎかな

行めを去とも竿ゆられなれ
海棠や白粉に紅をあやまてる
梅の花ちるや任に去ての雪
雛の灯にいぬきか袖かゝるなり
あちも見え宮の光や張氏ひてふ
菜の花やみな出拂ひし矢走舟
なの花や昼ひとしきり海の音
菜の花や油乏しき小家かち
なの花や法師か宿はとはて過し

なつの花やさと山寺の庵よまて
鞍馬の花や摩耶郷とひかれ日のくるゝ
さとしよ楽の舞はじめや百艘
飯寺の花路々若木て山桜
花ちるや我住む京は隠居有
桜ひと本老を俳はせさびし哉
人間は学問や山はちるらん
法輔は花まで燈を鳥帽子哉
むく廣丹波の鬼乃出ぬてく　おつ

山寺の冷飯さき桜哉
ひやしをは僧都の花も蝶哉
雪知やされさと山桜哉
花の常有ともならで慈訪哉
さひしさよ花咲めぐり山桜
花をまて蜂を住くる姫哉
みよし野は花盗人はなかりけり
花さかり此路程見え比　日暮さき
かりにあそるはなきとけれひのあるし哉

馬おりて高根の桜見付たり
祇也鑑也花に香炷んけむり
柏木乃ひろ葉見するや遅桜
又やまておもや皆もの花盛
桜ちる苗代水や星月夜
されは散て刺ある草の見やるかな
みな更て静かなる花や下り坂
むかし見し石山の桜ちりて葉
ちるは桜落るは花のゆふべかな

ちりはてて筏も花の梢かな
烏帽子脱て鉢とみる花見哉
永き日をいきてくるや壬生念仏
遅き日や霞んでゆる京のすみ
遅き日や山を草刈る大さか
くれかゝる日や山寺のかねもなし
月にきてしら覚ゆる花の色香哉
石工乃指やぬれたる花にしみ
大原や蝋燭の中に花たてゝ

うら限て皆すらへり春のくれ

大門の留守さし雁や春のくれ

なれなれて椿の師匠や春のくれ

ふり向さうな人ゆかし　花の露

山寺の南ハいつも春乃暮

春のくれ筑紫の人とやつれけり

いとまなき身を根無しやくれの春　すゞ

庵佛とさみ仕舞ハ暮られめ

おほくさの思ふ春の　以歩

ゆく春や眼ニ浮ぶあしめくれね　うしろかひめ

行春や思はぬ路をもたけぬる

ゆく春や命も知らで　了佐の宮

行春のいつも去らん　かゝら舟

春をとしむ人や桜ちらされ　以葉

夏之部

夏衣いつまてあをしみの田毎かな

能沢も諸弓矢て能ふ袷かな

こゝもくらしと見し世も忘白つ

二本乃あらし起や卯の花

ものくる人来まし性らも久

卯の花部屋の思の暑さかな

古さも人も五尺のくるふ絹

夏衣ねの女の眉毛いつまてあき

卯の花塵ちも掃ふ朱の出口

袷きて身は世をあらのまゝかな

はしたなき女櫺の嗔や杜若

大人ある男の子起りけり

虹を吐そひらかんとする牡丹かな

みしか夜の間とさらに寝なんかな

呉牛もうら捨てめかなの紋かな

花ありてこれきやんに何

指ら指てゑ地やかんとか

まよ喰ふてねるも物うきこゝろかな
金堀る山をも去しこゝろかな
親もなく児もなき身や閑かな
見か捨しや絶ぬ帰らぬこゝろかな
髭戯なる木の海で菓や生れけん
久しく眠りもせで木の芽ぬる
羽なくも心さへあればこゝろかな
聞く人もなき根にも木も招き
みしらぬや金もなきあぬ楓かな

鳴やさきおらや稲妻の翁哉
みしらぬの寄る菓もなく大井川
縫ぬや鳥も思ひなし夢の告
みしらぬや五月雨の人の山居哉 とまり
たらぬや浮世このある月一片
山伏の心の花の春や花ざかり
金の間の人もいそめ若葉哉
やとすれ木の目を覚したる つゝのはじめ
蔦日々あや海老や若楓

は間山よりの中のやの緑なり
徐の茶屋さ壮士飾ちて淋しかり
せからて親王まして里の秋ふか
葉桜や碁気くさありけり　奈良の京
岸根けり帆いねもしさやらなり
筍や柑を惜むて　垣の外
麦秋や河さねてや茄根の鮎
麦刈て青山みせし　家のおい
麦刈て利手鎌もてる公翁　非

麦秋やたおいぬる堺の浦布
飯盗む狐追ひ行麦の秋
狐火や五助畠乃麦の雨
夢さめてあそやとひく一秋節
鮒ずしの便も遠き夜みかな
木のさや節の口切るあるし　非
麦播てお峰手嵩や貝乃なりと
さし汐てるまの細江の布　非
さみれや美豆の翁　常にやかならもち

さみだれやそれもあさ川の堤ごし
山おろし早苗を撫て行かな
見わたせは蒼生よ田植時

琵琶湖

藻の花や蒼太か渚の水たまれ
佛乎下のぬるさもたえや蓮の花
蓮池の田風さしらむ葉うら哉
声をのみて蛙さ蓮の主人かな
呢中なたはまふ角の長みか

義色いちこきも啼を恰生
船やいはの長良の鵜舟曽見し
やら宿とまの宗に来て無為か
ゆふかくも茶店見る家ある哉立
動く比もあくそれ淀しあこちち
とうとはむ音ぼしの流やあむ立
花ら咲ら水てもうすむあ立
夜山やらちらたむいそれ ろくろ引
いさしか子料理もまたれ 土用干

花のりの戻る脚やもと乃岑
曠野中へ分るとれくやもと津
宅の條さ肘まくら酒呑む春
任にさ包ミ、閨とまねらせん
将ある此君たそれ白らの閨外
恋やたるら洛倉武士の扇外
眼さへ婉し忠君乃扇もゝ白ねる
主去れ出、扇をとりさし酒宴外
涼み舟袖よ隠る　列子外

蔦ろのやみ入記の帯ねさ諸れい
石坂の石にとりこし素夜の月
月ねやすの手からとすゝや夜のて
賊舟とよせぬ御船や夜の月
水里ひの山路やけ中ゝ法れ外
石工のこし炎檜みし法外
しほれや法のまゆみや　武者やらじ
鳥まれて水またきをしいやすの芭
やゝ霧さ花流れ蛙のちぬけなり

ひるくるゝ蛍のもろねや比叡おろし
学びきる机の上の蛍やりか
いさらゐや蛍のこれん扉渓まで
暇あれば隣同志の蛍やりか
ともし消えて暮らるゝやりか
雨はもゆる夢宿の蛍哉
蛍の浮き織月夜の内侍らる
一日のよるも蛍のはやり哉
昼とも蛍のもえる法刹哉

兵も大将氏とやられし
やるき松の指あやはつゑんこ哉
天てあらそえ上羽異の乳や弁娘
昼白や断てあ葉中 杭の花
夕白や武士ひとたしの裏ばき
ゆかしや牡丹焼く夢はらきて
木葉の像 法抜川

秋之部

温泉の底に我足見ゆるけふの秋

今朝の秋や精進のはじめかな

女郎花二もと折りぬ今朝の秋

硝子の魚おどろきぬ今朝の秋

うちはれて焼けしたる今朝の秋

菊川に公卿泊けり天の河

る紙衣猿猴乃舟の宿

魂祭王孫いまだ帰り来ず

徹書記のゆかりの宿や玉祭

地蔵会やちか道を行祭り客

錦木の門をめぐりておどりかな

看病乃耳に更ゆく踊かな

あれたる踊も秋のあはれかな

銀閣に浪花の人や大文字

御侍や菩提寺院乃施餓鬼

掛待へとまれ色もや抱女かな

さし入や納戸の暖簾ゆかしさし

二三軒ともしゆく旅の人

いなづまや浪もてゆへる秋津洲　鎌倉君子

稲妻や二折三折釼澤

いなづまや秋津島根のかゝり舟

いな妻や佐渡なつかしき舟便り

花火見えて湊がましき家百戸

狩衣の袖より捨る扇かな

故里の坐頭も集や角力かな

よき角力出て来ぬ老の恨かな

紀角力の草てもたくや裸谷

訪ひよ寄し角力かれしき郷かな

角力取佐幸の小柳とまりの宿

ちら佐々の角力まで見しめ　鎌倉

ぬれたつ三つ足ぬ名を出するむしかな

白手身やおなさる起たる豊のうへ

湯釜もゆすき宿やりん花のつゆ

舎利となる身の朝起や牛の声

篠竹やなすとあるけたし
旅人の火をおこしたる秋の山
桐の葉は落ち尽すなるおち葉哉
修理寮乃雨にくれゆく木槿かな
修行者の径にめぐる桔梗かな
とりてみし一把てあるめ女郎花
黄昏や萩に鼬の高台寺
うら枯や萩の枝末のるかとぬかも
閑のかげ冬むる強るや萩のかな

萩はくれそ玉田横やへひれゆく
秋たまし咲し花咲く花屋里
葉すて葛まとひよれ白やほたる
天狗風のちりて葛の秋かな
花は詩刈り薄とこそいあさまくら
地下をこくれゆく芭蕉の葉かな
追風ちぃ落ちらさるはかなく
そめあめ尾のゆらはむ赤とんぼ
蝉や相知らぬ弦の切るる時

秋の野乃人とまぎるゝかゝし哉
蓑虫や笠置の寺の屏風の中
からし帰袖をうしなふ古井石
加茂川のかしかは知らで都人
田をうりて田を眺むや秋の水
秋雨や我菅蓑はまたぬらさじ
秋の夜は鳴るや雀を放ちたる
なむといふて敵ける僧と秋の風
秋風に散るや幸都姿の艶眉

十六夜のこゝろ去ぬ秋の風
打よりて後住かはる寺の秋
唐黍のおどろきやすし秋の風
郭内や画に書く夢の人通ひ
雲を収て高祢の間まあへり
人をとる灘はすゞしか京の海
手洗ひ宵や女あるじに女客
宮居ある村は更なきけふの月
盗人の首領哥よむけふの月

月の宴秋ゆら哉のちまふ
五六升芋煮る坊のろ狂介
三井寺やてゝの詩作る踏落し
名月やおさめかぬいあはをとり
十六夜や鯨来そめし熊野浦
後の月やとはて降るさとも
あの声すめさんもえぬ隣介
貴人乃閑こゝ立ち悦く祐介
桃もと祐と毛するたちれ一のか

ちかしや恋の里のはある介
雲の峰を廣し子この祐介
今日稲こ嵐の上たく田界介
今日稲の花や雑しも燕山の名山
稲られい小草こ秋の日のあたらふ
立たふま稲すゞびゆはの卯介
中なゝ落穂拾いさや尉と姥
昼めし菓山子夕ぐれ底の菓
稲られい化とあらえ花かしら

花紅葉の彩色のよき栗山子なり
おそはす秋の夕む栗山子なり
錦きる姿さしとくかしなり
笠とれて面目もなき栗山子なり
船頭の棹とられたる姿かな
鴻の巣の酒代とかる姿なり
姿かして嵐のつよき瀬
暁の寝ねに矢のた流のこゑさかな
手洗二ツ尾婦くすの姿かな

関の火ともせい滅るおかふ
西原を通る姿のあしたかな
妻もちも寺でもの姿すの姿かな
差すさ帆柱ぶらそのまゝかな
足駄のまき田やそしや ほとしかな
落しかな柳ともにまくら
古寺と唐紙を懐くやうかな
御宿とる公家の笛 楠
うたくしや姿かなのあとかかし

茄子刈てあるや我中くてのもた
根さはる花や吉野の葛畠
曼珠沙花蘭になりて狐啼
徒むの日も色た葉々葉有り
葉堀りてや蛇骨を隠けり
下紐の女萩もとや萩の花
黄に咲は何の花そも萩の中
萩の穂を土に盤子發附法師
松明消て海暮はしみゆる花野哉

猿の月に啼声やくされやま
鰯得てうーろめたさし浪の下て
鮎落て寄木とまる抹康歟
鮎寂ちて葉大ゆらしさ河の里
鴨のうたし未啼や梅もどき
鴨の声かし去年ぞる実のあかき
草摘や似色ら鵙の鳴るうちさ
椿さくて葉しほ菓花の葉
秋風いたいを吹たそ諫の穂

卯の花のゆゑにも似たる芸の躰
小男鹿や僧都が軒も細柱
りものと三つ集めて
発句せよといへるに
猪乃狸なりりや、猿の声
猿は啼や雪する暁の月
たち出の心地おそれ鹿の声
山寺のすゝき夜の霧、猿の声
窓の灯と山へもみせそ猿の声

されいおそ咲者は花まん敗荷
秋の野の絵を伴ふ越の見へて
掃除閑燈
住むかたの秋の露を古く影あり
秋の夜やたゝ青くも南泉師
手絹してもふとんせず起されて
巫女と狐寒さむ虫
書讀る師の鼻声は霧な
若紙の油蓍は夜あり

をまたれて独碁をうちおさむ
貧僧の佛をきざむ夜寒かな
ひよろ〱と二もとさく黄菊かな
長摘てうれしたる菊の香かな
白菊や庭に余りて畠まで
二節咲て菊まゐらする佛たち
蘭の香や菊より暗きほとりより
かの蘭や五助が庭に咲まん
梅ちるよ皆おもに泄しと詠かな

柳條の小寺淋し梅ちるよ
練飲の價はいらめ新酒かな
狂の月踊る人ととふ夜かな
後の月鴫たつあとの水の中
三井寺て緞子の経石や塔のそく
萩の風ひとさゝらし若男かな
芦の花渓翁が宿のけふり哉
春や老木の柳を五六株
柳の葉の老とくちりきめ菴藤
白田

秋の夜やうちひらめける　石の人
猟香踏て散らる兄の下山か
黄さそみし猪を山のたゝきね
おもる紅葉ふかさし　撰はし
さかもと葉かの花色ぞ紅葉かな
山くれて紅葉の朱をうばひけり
紅葉見の岩に水飲　渭井
もみち見や用意かしこき　傘に帯
さひしさの娘なくもあり秋のくれ

人は何に化るらし　秋のくれ
訓読の経ととかや秋の暮
一本て人をとふや秋の暮
かきりある命のひまや秋のくれ
門とちて旅人てあそふ秋のくれ
鏡ともせとひ法しせるや秋のくれ
むさしの西へ足は東秋の暮
声を仰く狸と秋を惜みけり

冬之部

蓑虫のぬれても世にふる時雨かな
水さへもあをてた江の時雨かな
梢もれて帰るのはやり傘ひとつ
目前と昔を見する時雨かな
釣人の情のたまるも夕時雨
化さうな傘かす寺の時雨かな
蹄ぬれて雀と日の子持時雨かな
禅林の廊下へ化しに時雨かな

たそしのやとのひすし初時雨
海棠の花は咲きや夕時雨
髭剃時雨
雲のひとはしおいかそて濡れかな
子をと猪狩ゐて日くるる時雨かな
しくるるや長田か狩の風なれ時雨かな
まの走て里田へ降る時雨かな
蓮かれて池あまふり時雨かな
半江の斜日片雲の時雨かな

茶袋と捨るもあはれ萩か本
瓜根草の紅葉を踏や道のへ
こゝまでとしたふて揺る芒かな
磨臼の音に誘はれし芭蕉かな
芭蕉して長くおもふ磨臼の音
麦蒔の魍魎も出る夕日かな
招されて邂逅の美咲く紅葉
枯尾花みゆるか驚てさそひけり
秋去ていく日もあらぬ枯尾花

三日月も露てかゝりて枯野かな
畠までもなくて悲しき枯野かな
石に詩を題して過る枯野かな
こからしや廣野くどうと吹起る
あのほとや那河の石を踏みやる
風やのそひて出る洞のいろ
野の馬の蹄をきみおる　それの紅
松明振て舟橋やる夜の紅
我骨のふとんにさむき霜夜かな

初あられやゝとはらふ雀をきく　とんる
ちる霜をもむ嵐の牙の声高し
雪舟の下に雪は綻びけれ　左き
貧食を儒者とはまるなりけり
にはの膳も飯のはなり　ゆか
にはや梢ゆかしき塀となり
にはや北も戸れて四五
姉ひさきや裏此も開やは
鬼王か妻て捨れし　金かい

蚕其ひとつ風の吉原をさけ　了
とき蔵国宗徒とある一花しさて
孝行な子供等もよんでなゝ　浅
宿もんの紙衣の肩や朱塗　村
紅やたとしときは紙衣ほ事
晴すねさ頭巾をとなすうきあ
路もちの闇秋子涂合ふ頭巾かな
肘ある医師もさび頭巾か
埋火やものさびしさをさあ　比丘比丘尼

埋火や去年は消けれねやいくたひ
う流み炭も我名をとらふそかな
火桶炭団を喰すれどもひかり

悼文虎

白山路の雪月さひらくや猿の道
旅立や白いかんむりの火もえん中より
猿さ猿を与路さ路る旅かな
手をとらせて也は暑や流たき
墨染の袖の錦やちらたゝき

叔須賀川の猿まりさたし銭
冬枕の朧も氷のひゝきかな
大雪とおもひ葉ま実の戸ぼし時
大雪や上戸ぶれていかきて
雪皆とさかんとされい風中
雪むかや糧たのしさ小窓ちる
雛むも郷なりけり深雪かな
雪のふりて梢ともそけわ僧かな
雪の旦母やおのはじめてたさも

雨の時貧しきハ簑の雪とめり
雪折もきこえて暗き夜なりけり
木曽路の旅人とまん雪の朝
住吉の雪にぬかつく遊女哉
邯鄲の市に鰒見る雪の朝
嵐に雪とふとんきせたり雪の宿
兵書の礎をあされむ夜の雪
鷺立る雪一双乃はぬみ哉
鶯や西行乃背も錦革

鶯や花の君子ハられてのち
水鳥やてうちんひとつ坪をとる
水鳥や夕日江に入る垣の梅
水鳥や巨椋の舟に木綿うり
水鳥も見えぬ江わたる寒さ哉
佐保川に鴨の毛捨るゆへ哉
鴨遠く鍬そゝく水のうねり哉
鍬洗ふ水のうねりや鴨一羽
御手討草も木もちあらぬ野哉

やさし伊予の女のなよやかにもとう
あはれさをいふは花にやくり出
みよしのやもろこし一ぺんの夜の立
紅葉立亦折のしき林藤か
里好きて江の名むしの生け
慈涼に詠もちらし井手の里
府儒若遊の美女ひかり家
なる梅といふも減ならむ　書生か
桂飛乃妻もこの花くらく陰

玉川の前にちらし鮎乃友
鮎汁の甚手と見えて上苻か
鰻の蒲焼生文を揮かれたり
海のなす京ならは江やまとげ
鮎汁の君と鮎に匕子期伯か
河豚汁や子を産の家の居足
鮎汁やかられてうかれ鮎なる
逢ふとき思ひ君やうとけ
その昔海龜の海や鮎やなるき

此月のよかくて鯨おほし
鯨とけ鼎て伽羅を焚ありかる
山ならし三の鈴ののれかふ
よれまやせんとこそ坊す錦冊
巳さはし鯨い逃て月ひとつ
なこまり心の奥のましの山
謂なくて山家集ありなまり
なさい家妻もあまもこの坊
松や出て眺め人もあきなきなまり

桃源のちちの細まもなまも梨
貞徳の調なのさりてなまなまり
伝流ある下男居る築なこまり
なこまり母衣へ十字の様比丘尼
乾鮭もの哥る京都やなれ不立
うら鮭や刺身前の上太刀
のうさけやかみそのは得もなれそ様
乾鮭の花茶やかみその岩俵
此ん松ての鮭とるし華都深く

寒山に木を伐て乾鮭を煮る
冬川や佛乃花の流れ来る
冬川や孤村の犬の猫を追ふ
寒風に尻背けたる駄荷馬
寒月や門を叩いて背の声
寒月に木を切る寺の男かな
寒さや石の中なる背の瘡
石となる樟の梢や冬の月
鶯の送ふて居るや冬の梅

寒梅やたうえんの花といはんなれとも
寒梅や熊野の温泉の出るもと
炭売に日のくれかゝる師走かな
煤掃や調度ぞまけにかなふ誰
椎捨るとし木の枝に雀かな
松は果しや外の浪ひゞし
横本の板もやれて古暦
暑の起こる暦の表紙かな
けとしのめや海に草や菜　釜七貫

除紙

いやうらんえ日い又あきのさと

明治三十三年十月十一日印刷
明治三十三年十月十八日発行

編者　水落露石

発行兼印刷者　大阪市東区安土町四丁目百三十七番邸　鹿田静七

発行所　大阪市東区安土町四丁目百三十七番邸　鹿田松雲堂

不許複製